

# 学ぶ意欲を高め、確かな学力をはぐくむ授業の創造

## － 学び合い・高め合う授業の追求 －

札幌市立啓明中学校

### I 取組の重点

#### 1 テーマ「学ぶ意欲を高め、確かな学力をはぐくむ授業の創造 － 学び合い・高め合う授業の追求 －」

学び合い活動の充実と確かな学力の習得を

本校では今年度、基礎的・基本的な知識・技能を定着させ、各教科における確かな学力を身に付けさせるためには、生徒の「学ぶ意欲」を高めることが重要であるととらえ、これを教科指導の重点とした。

#### 2 テーマ設定の意図

「生徒の学ぶ意欲を高め、確かな学力をはぐくむためには、教科の学習活動において充実した『学び合いの活動』を取り入れた授業実践が大切である」という研究仮説のもと、取組を展開してきた。本校としての研究の視点を以下に示す。

##### (1) 「学び合い活動」の充実した授業

- ① 場面と課題の設定の工夫
- ② 考えを伝える表現活動の工夫
- ③ 考えを理解する力をはぐくむ工夫

##### (2) 「確かな学力」を身に付けさせる取組

- ① ティーム・ティーチング（以下TT）の在り方の工夫
- ② 基礎学力の定着が不十分な生徒に対する指導の在り方の工夫

#### 3 本校における全国学力・学習状況調査等の活用の進め方

授業改善のために活用

##### (1) 学校評価の指標の一つとして活用

本校では、全国学力・学習状況調査の結果及び、本校独自で行う年度当初の全国標準診断的学力検査を学校評価の指標の一つとして活用している。なお、これらの活用の究極の目的は、教師の「授業改善」に他ならない。

その進め方は、

- ア 本校では12月に「学校評価教職員公表研修会」を設定している。全国学力・学習状況調査結果分析から生徒の実態把握と改善の方向性を提示する。
- イ 学校評価を受けて、年度末の校務反省において各教科会、教務部や研修部等の関係する分掌で検討し、具体的な改善策を検討する。
- ウ 年度当初、各教科会、関係する分掌より授業についてのねらいが焦点化・構造化された年度推進計画を提示する。
- エ 4月当初に行う全国標準診断的学力検査により、より新しい具体的な生徒の実態を上記年度推進計画に加味する。

##### (2) 生徒に対する指導資料として活用

全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査結果において、生徒の学ぶ意欲の基盤となる学習習慣や学習に対する意識を分析している。これを生徒の日常における学習に対する意識を向上させたり、学習習慣を確立させる上での参考資料として活用している。また、国語、数学の結果も併せて公表することにより、生徒、保護者への啓発としても活用している。

生徒・保護者へのフィードバックとして活用

## II 取組の具体化

### 1 本校における学力・学習状況に関する課題～全国学力・学習状況調査等から

本校では基礎学力の定着が不十分な生徒の割合が年々大きくなる傾向にある。これらの生徒に確かな学力が身に付くようにするとともに、基礎学力が定着している生徒に対しては、活用する力が身に付くようにするなど、学力の向上を図ることが本校の使命であると考えます。

#### (1) 言語活動の取組に課題 … 国語科

言語活動全般…  
伝えること・聞くことに課題

①「相手の立場や考えを尊重し、話合いが目的に沿って効果的に展開するように話したり聞き分けたりして、自分の考えを深めていくこと」に課題

・学習指導要領では「話すこと・聞くこと」の領域である。本調査結果から生徒は事前に用意した項目だけの質問に終始し、相手の話を聞いて疑問に思ったり興味をもったりしたことなどを追加して質問することが不足していることが分かる。これは日常の生徒の会話においても単語のみによる会話や一問一答に終始する会話など同様の傾向が見られる。

②「様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けること」に課題

・学習指導要領では「読むこと」の領域である。本調査結果から生徒は複数の資料を比較しながら読んで、共通して書かれている情報を読み取ることに課題がある。

#### (2) 情報収集・活用に課題 … 数学科

全般的に情報を  
収集し、活用する  
ことに課題

①「具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、一次関数について理解するとともに、関数関係を見出し表現し考察すること」に課題

・学習指導要領では「数量関係」の領域である。本調査結果から生徒は一次関数と比例の特徴を区別して、ある事象を一次関数とみなせることを説明することに課題がある。

②「数量及び数量の関係をとらえるために文字式を利用できること」に課題

・学習指導要領では「数と式」の領域である。本調査結果から生徒は事柄が成り立つことを説明するためには、結論となる事柄を明確にし、見通しをもって説明を構想することに課題がある。

#### (3) 基礎学力の定着が不十分な生徒に対する取組に課題

1日の家庭学習時間が2時間以上の生徒が約半数を占め、まったくしない生徒もごくわずか、生徒の学習習慣は確立されているととらえる。しかし、基礎学力の定着が不十分な生徒の割合が大きくなる傾向にあり、1年生入学時からこの傾向がうかがえることや、この傾向が顕著に表れている学級が出現してきていることが最近の特徴である。

### 2 改善策の具体化

#### (1) 伝え合う力の育成 … 国語科

伝え合う力の育成を

実生活に生きてはたらき、各教科の基本ともなる国語の能力を身に付けさせるため、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力や、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う力の育成を図った。また、情報を正しく読み取り、文章の結論につながるように書いたり、資料に表れているものの見方や考え方をとらえ、伝えたい事柄や考えを明確にして書く指導の充実も図った。

そこで、授業においては以下の点に留意して伝え合う力の育成を図った。具体的な手立てとしては、「小グループ学習」の積極的導入と「1分間スピーチ」の授業実践である。

① 相手の意図を理解して適切な質問を行うこと

・効果的なインタビューについては、相手の意図を理解して適切な質問をすることが大切である。相手の発言や様子に応じて、事前に準備していた質問に加えてさらに詳しく尋ねることなどを指導する必要がある。

表現活動や話し  
合い活動を

② 複数の情報の共通点や相違点を整理すること

- ・様々な情報を吟味し目的に応じて必要なものを選び取る能力を身に付けさせることが大切である。その際、関連する複数の情報を比較し、共通点や相違点をまとめるなど、情報を整理する学習に取り組ませることが大切である。

(2) 表現活動や話し合い活動を通して、数学的な理解を深める … 数学科

重要な概念や技能を確実に習得させることが必要である。また、学力向上とは、単に数学の得点が高くなることではなく、生徒が自己実現を果たせるように探究心と自信をもたせることもポイントとなる。そこで、授業においては以下の点に留意して数学的な理解を深めることとした。具体的な手だてとしては「TT」の活用と「小グループ学習」の積極的導入を考えた。

① 日常的な場面や他教科の学習の場面において、数量の関係を理想化したり、実際のデータを単純化したりして、数学的な表現や処理をすることができるようにし、それらを用いて数量の関係を明らかにし、分かりやすく説明することができるようにすることが大切である。

② 予想された事柄が成り立つ理由を、示された方針にもとづいて説明することが求められる。事柄が成り立つことを説明するためには、結論とその根拠を、文字式や言葉を用いて記述できるようにすることが大切である。

(3) 放課後の時間の有効活用

これまでに「長期休業中の学習会」を行ってきた。今年度は、放課後の時間を有効活用した「教科相談日」を設定し、基礎学力の定着が不十分な生徒に対する取組を行うこととした。

(4) 家庭と連携した学習習慣の確立

1日2時間以上家庭学習を行う生徒が約半数を占めるが、少数ながら家庭学習の習慣が確立されていない生徒に対する取組として家庭に対する啓発が必要であると考え、いくつかの取組を行った。



基礎学力の定着  
が不十分な生徒  
に対して

### Ⅲ 取組の実際

1 1年生国語科の実践 話し方入門 スピーチ「思い出のひと品」

(1) 4人グループ学習を取り入れて … 小グループでのスピーチ練習

本時の学習のねらいは、「分かりやすく伝えるために」である。このねらいを達成するために4人グループ内で練習を行い、友達からアドバイスを受ける授業形態を取り入れた。なお、「学び合い」の場面設定となる4人グループは、全員が意見交換をする機会を保障するためのものである。

(2) スピーチ練習の場面から

スピーチ練習においては、教師が活動のねらいと評価についてを明確に伝えることを大切にしました。教師は「付かず離れず」の姿勢で、活動を観察し、必要に応じて助言を与えたり、望ましい活動に対しては評価を与えるなどした。

スピーチ後、他の生徒からアドバイスを受ける場面では、どのグループも積極的な交流が行われるなど、「学び合い」の姿が見られた。

この活動では、4人グループが適切であった。人数が少なすぎると、交流が進まず、「気付き」に到達しない。逆に多すぎると、交流に参加しない生徒が出てしまう。題材に応じた適切な指導方法が構築されつつある。

以後の総合的な学習の時間におけるプレゼンテーションでは、この学習で習得した技能を駆使してどの生徒も「わかりやすく伝える」ことができた。



小集団学習は4  
人グループで

関わりを大切に  
して、「わかり  
やすく伝える」  
方法を身に付け  
る

## 2 1年生数学科T Tの実践 比例・反比例「章のまとめ 卒業試験」

自分の担当の問題を友達に教える

### (1) 4人グループ学習を取り入れて

各グループの生徒個々がそれぞれ問題を担当し、自分の担当の問題をグループの友達に教える活動を取り入れた。この活動のねらいは、数学が不得意な生徒は、友達の援助を受けて理解を図り、得意な生徒は分かりやすく教えることで自分の理解を深めることにある。



T1・T2が別れて指導を行う

### (2) T Tの活用

#### ① T T配置の工夫

T1の援助のもと各グループは学び合い活動を行い、別室でT2による卒業試験を受け、合格の際にはチャレンジ問題に取り組む。不合格の際にはグループで再度問題に取り組み、再試験を受ける。本実践では同一教室で2人の教師が指導を行うのではなく、別々の教室において指導を行うこととした。

#### ② 「学び合い活動」の効果

- ・ 「卒業試験」は生徒の学習意欲を喚起するものであった。意欲的に活動するグループが多く見られた。
- ・ 理解が進んでいる生徒がつまづいている生徒に対して働きかけていく場面が多く見られた。前者にとっては他に教えることで一層の定着が図られ、後者にとってはつまづきの解消につながり、全体としての理解の向上につながった。

「学び合い」は理解の定着に効果的

## 3 放課後の時間の有効活用 … 「教科相談日」

1年生において教科相談を、11月（1日日程で国・社・数・理・英）と2月（2日日程、1日目は国・数・理・音・英、2日目は国・数・音・体・英）に行った。ねらいは、『『努力を要する』状況の生徒を『おおむね満足』に』であり、基礎的・基本的な内容を中心に行った。対象生徒は希望生徒とした。参加生徒は11月では延べ40人程度であったが、2月では2日間で延べ120人の生徒が参加した。以後の定期テストに好結果を示す生徒が多く、この取組は効果的であったととらえている。

少しでもC評価生徒をBにするために

## 4 家庭と連携した学習習慣の確立 … 啓発活動を中心に

本調査の生徒質問紙調査結果を学校だよりやホームページで公表したり、教科だよりを通して家庭学習を促してきた。また、教科ごとに定期的に家庭学習の課題を課したりもしてきた。結果として、平成19年度では家庭学習時間が2時間以上の生徒が49.5%であったが、平成20年度には59.5%へと増加した。

## IV 研究の成果と課題

取組の成果が学習意欲の向上、結果の向上へ

### 1 本校の取組における成果

- ・ 学校評価における生徒アンケートにおいて「意欲的に学習に取り組んでいる」という質問に対して「強くそう思う」と回答した生徒が25.9%（平成19年度）か26.3%（平成20年度）へと微増した。また、1年生国語科1学期の観点「話す・聞く」における「努力を要する」状況の生徒は28人であったが、2学期は14人と半減した。これまでの取組によって、学習意欲や観点別学習状況に向上が見られている。

日常とのかかわりを重視した授業の構築を

### 2 本校の取組における今後の課題

- ・ 「国語（数学）の勉強は好きですか」に対して「当てはまる」と回答した生徒の割合は、平成19年度で25.2%（28.4%）、平成20年度で24.4%（29.3%）と高くはない。そこで、日常とのかかわりをより重視した授業を構築したり、数学科における実験・実測を通しての指導等生徒の学ぶ意欲が高まる教科指導の在り方を工夫する必要がある。また、朝の読書活動を導入し、国語好きの生徒を育てていきたい。